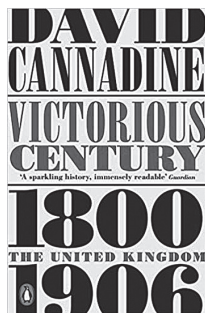


書 評

David Cannadine, *Victorious Century:
The United Kingdom, 1800–1906*
(London: Allen Lane, 2017)



小関 隆

19世紀連合王国の概説書として、本書は今後長く必読文献と見なされることとなろう。学術的に信頼できるのはもちろん、さまざまなトピックを縦横無尽に繰り出し、大部ながら最後まで読者を惹きつけて離さない筆致は、まさに練達の技と呼ぶに相応しい。これから本格的に勉強しようと志す初学者にとって格好の出発点であると同時に、研究経験を積んだ読者もまた本書から多くを学びうると思われる。評者は特に、歴史書をいかに書くか、という問いに対する1つの回答を本書に見出した。政治史を基本としながら、社会経済史や文化史の成果を随所に織り交ぜ、帝国史的な広がりを意識し、大陸ヨーロッパへの目配りを怠らず、魅力的な個人を絶妙なタイミングでクロス・アップする叙述は、最終的に19世紀連合王国像ともいうべきものに収斂する。一方でディテールが集積されるばかりで一向に全体が見えてこないような、他方であまりにも単純な図式に依拠したラフな大風呂敷としか受けとれないような、そんな歴史書が少なくない中、著者が示してみせた膨大な情報を「総合」する力は貴重である。

以下では、本書の細部に立ち入ることは避け、著者の「総合」する力が描き出した19世紀連合王国像を問題にしたい。像の根幹に据えられるのは、国制秩序や政治文化、地理的領域の安定性であり継続性である。もちろん、本書は19世紀連合王国が直面し対処しなければならなかった困難や問題、その結果として生じた変化にも周到に論及しているが、強調されるのは、タイムリーな改革の実施によって革命的動乱を巧みに回避できたことである。世界が大規模な構造転換を遂げてゆく時代でありながら、連合王国の根本における凝集性は保持された、これが本書の基本命題である。手放し

の礼賛論に与しはしないが、それでも著者は19世紀連合王国を総じてポジティブに評価する。「19世紀の多くのイギリス国民がさまざまな意味で欠点を有し、過ちを犯しがちだったにせよ、彼らが並外れて活力に充ちた勤勉で創造的な国民だったことに疑いの余地はない。」

こうした19世紀像は、1800年から1906年までを19世紀と捉える本書の時代区分と不可分の関係にあるように評者には思われる。1800年はそれまでイングランド・スコットランド・ウェイルズが構成してきた連合王国にアイルランドを組み込むユニオン法が成立した年であり（実施は1801年から）、1906年は自由党が総選挙で地滑りの圧勝を収めた年である。19世紀は史上最大の連合王国の成立とともに始まり、国民生活への国家の積極的介入が是とされる政治史の新段階への突入とともに終わったことになる。そして、「長い19世紀」が最終的に終焉するのは著者の幼少時代に当たる1950年代、1960年代以降には19世紀的なものとの訣別が不可逆的に進展した、というのが本書の見立てである。

異なる時代区分を施したなら、いかなる19世紀像が浮上してくるだろうか？ 評者は1800～1922年を対案としてみたい。アイルランド史の時代区分としてはごく常套的だが、この時代区分に従うなら、19世紀とは、1800年に成立し、自治領となったアイルランド自由国の離脱によって1922年に再編・縮小された最大規模の連合王国の時代、ということになる。また、連合王国に残留はするものの、1920年には自治議会・政府をもつ北アイルランドも成立する。つまり、本書が強調する国制秩序や地理的領域の安定性・継続性に終止符が打たれたのは1920年代初頭においてであって、ここに19世紀の終点を見出すことには説得力が備わっているだろう。さらに、1922年の2年後には、自由党に代わり保守党への最大の対抗勢力となっていた労働党が史上初の政権を樹立する。ヴィクトリア時代以来の二大政党制がはっきりとターニング・ポイントに達したのであり、この点も1922年を終点とする対案の妥当性を補強すると思われる。

アイルランドのステータスを基軸とする1800～1922年という時代区分をとると、19世紀連合王国は本書が描くほど安定的でも凝集的でもなく、むしろ最終的な再編・縮小に向けた一連のプロセスを辿ったと映る。プロテスタントが支配的な連合王国にカソリックが多数派を占めるアイルラン

ドを組み込むユニオンの体制は、当初から深刻な脆弱性を抱えていたのであって(著者の表現を借りるなら、ユニオンは「必要だが完全には果たされていない結婚」)、19世紀連合王国は自身を掘り崩そうとする力に常にさらされていた。もちろん、19世紀のアングロ・アイリッシュ関係が緊張によってのみ特徴づけられるわけではなく、この関係には明らかにコラボレーションの側面もあった。だからこそ、1840年代のアイルランド大飢饉をはじめとする数々の難問に苦闘を強いられながらも、ユニオンの体制は120年余りにわたって維持されえたのである。それでも、ユニオンがアイルランドの多数派を連合王国の一員であることに満足する「ウェスト・ブリトンズ」とすることに失敗したのは間違いない。連合王国の他の構成部分と違って、アイルランドの警官が武装を常とした事実はシンボリックである。

アイルランドが突きつける問題への対処にあたって、時にきわめて暴力的で苛烈な手段が駆使されたことを最も端的に示すのが、本書の時代区分からは外れる1913～23年のアイルランド革命期である。「ブラック・アンド・タンズ」や「オーグジリアリズ」のようなパラミタリを活用するあからさまな強圧は当時の「先進国」の規範から明らかに逸脱しており、広範な批判と抗議の対象となった。世界で最も進んだ文明を実現しているつもりの国の暗黒面が連合王国領内で露呈したのであり、連合王国の外にまで視野を広げれば、そうした事例が以前から枚挙にいとまがないこともまた、改めて知らしめられた。19世紀連合王国の安定性と継続性は、仮借なき暴力行使によって支えられていたのである。そして、アイルランド革命をめぐって尖鋭化した政治の「軍事化」と議会政治の機能不全は、19世紀連合王国を終焉に導く力となる。この点に関し、ジョージ・デインジャフィールド『リベラル・イングランドの奇妙な死』(1935年)は今でも示唆的である。

もう1つ、第一次世界大戦が本書の射程に収められていない点も重要である。「現代世界の起点」であるとともに「19世紀的世界が行き着いた先」でもあった大戦をどう把握するかは、19世紀連合王国の理解にとって決定的な分かれ目となる。大戦が1つの時代の終わりを画した、との認識は、大戦直後の時期に広く共有された。たとえば、戦場特派員として大戦期に多くの読者を得たフィリップ・ギブズは、1921年刊の『ヨーロッパの希望』

で、「大戦前には見られなかった … 粗野で残忍な精神」の広がりを指摘している。人々の精神は、「過去6年の間に、6世紀の間以上に変わってしまった。」いうまでもなく、「イングランドを芯から揺さぶった」大戦がその原因である。ギブズはさらに、新たな世界の到来にまで論及する。「歴史を1918年11月11日で区切り、古い世界と新しい世界を大戦前のそれと大戦後のそれというように分かつ線が、おそらく新たな出発点なのだろう。」アイルランド革命の場合と同じく、大戦を視野に収めないことが、安定と継続に力点を置く本書の19世紀連合王国像を支えているのである。対案の立場からすれば、大戦の中から新たな世界が生まれた、という認識の広がり、1922年を画期と見ることの有効性を後押しするものといえる。

もちろん、評者は1800～1922年こそ19世紀連合王国を把握するうえで最善の時代区分だと主張しているのではない。大戦前後に断絶を見るギブズのような認識に、「1906年の総選挙が新たな時代の幕を切った」というアーサー・バルフォアのこトバを対置することもできる。2018年4月の来日講演の席で、著者は、大戦以前の部分を書いて既に500ページを超えていた、との趣旨のことを述べ、時代区分から大戦やアイルランド革命の時期を外した理由を示唆したが、現実的に考えるなら、この理由は説得力を欠いてはいないのだろう。ただし、本書の時代区分にしても、他の時代区分（最も通説的なのは1815～1914年）に対する優位性を十全に主張できるわけではない。著者の言い分は、1800～1906年の括りで19世紀史を叙述しようとした者がいない事実だけでも「そう試みえる充分な理由」だ、というものにすぎない。時間枠が違ってくれば、時代がそれに応じて違った相貌を呈するのは不思議なことではなく、19世紀連合王国も例外ではありえない。1906年を終点にするとその安定が、1922年を終点にするとその暗部が際立つのである。

最後に改めて「総合」について述べておきたい。かつてのエリック・ホブズボームやトニー・ジャットに匹敵するような「総合」する力をもつ歴史家といったら今日では誰がいるのか、評者には躊躇なくあげられる具体名は少ない。歴史学が備えるべき「総合」する力が衰微しているのだとすれば、それは由々しきことだろう。「総合」する課題を手放した歴史学にできるのは、専らデータ収集ということになってしまいかねないからである。

想像したくもないことだが、データを「総合」して大きな歴史像を描く役割がAIに委ねられる時代が到来しつつあるのかもしれない。AIという神に奉仕してデータ収集に勤しむ働きバチの立場に甘んじることを拒みたいのであれば、歴史家は「総合」する課題を引き受けねばならない。その作業は不可避免的に価値づけと取舍選択を伴い、そこでは歴史家自身の価値観や判断力が問われることになる。「客観的」の砦に立て籠もってはいられない。疑いもなく、本書は「総合」するしんどさと格闘した歴史家の達成であり、われわれが日々さらされる「歴史学は役に立たない」という批判への応答ともなりうるだろう。

——京都大学人文科学研究所教授